

入江長八 の 作品が残る

重要文化財「松城家住宅」の 塗壁について

その5. 天井ランプ掛けの鍍絵について

早稲田大学理工学術院
嘱託研究員

齋藤金次郎

●はじめに

本号から2回に渡って長八の鍍絵について紹介したいと思います。

松城家住宅の作品は長八が62歳で鍍絵の制作活動を旺盛に始める、初期的な作品の様子を知る上でも貴重な資料と言えます。長八が鍍絵を施した経緯は定かではありませんが、松城家は深川や沼津にも店を構えていました。当時、深川に住んでいた長八にとっては故郷松崎と江戸間の往来には好都合であり、それによって親交が深まり、行われたものとも考えられると共に西伊豆出身の同郷の誼としても一つの要因として挙げられます。一方、松城家では廻船問屋を営む傍らで幕府の御用達係に命じられ財をなしていたことから、西伊豆地方において最も繁栄している証を著名人である長八が携わることによって、表に出すための好機でもありました。

長八自身の鍍絵の制作時期は2階南縁北面壁の「雨中の虎図」に落款があり、それによると明治9(1876)年8月と記してあります。恐らく左官仕上げは剥落や亀裂防止等の故障を避けるため、造作工事が終わってから行うのが一般的であることから判断して、松城家住宅竣工間近の明治8年の後半から9年にかけて、作品を制作したものと考えられます。また、建物は既に解体されてありませんが、同地区の大田家にも「龍」や「鷹」等のランプ掛けの鍍絵を制作しています。

長八の作品と思われる鍍絵は図-1のように主屋の内部に天井ランプ掛け4点、座敷廻り壁に3点施されています。モチーフは長八が得意とする和風の伝統

的なものが題材として描かれているのが特長的です。天井ランプ掛けはいずれも煤けておらず、実際に灯具を吊り下げて使用することはなかったようです。

今号では天井ランプ掛けの鍍絵を紹介したいと思います。

<牡丹の図> 1階土間南側出入口天井(写真-1)

牡丹の鍍絵は1階土間南側出入口天井に施され、天井は全面を漆喰塗りとし、牡丹図は西寄りに配置されています。大きさは、幅1024mm、高さ825mm、模様部分の漆喰の厚みは3mm程度で中央にはランプを吊るための金具が取り付けられ、図柄は四葉形の外輪の中に漆喰でレリーフ状に牡丹の花を3輪と葉を描いたものです。色彩は施されていません。外輪の四葉形の形状は松城家の家紋を表現したもので、中央付近には書き判で「天祐之章」が記されており、明らかに長八によって制作された作品となります。この印章の向きから南を図柄の上としており、建物の中に入る際に見上げると上下の方向性が分かるようになっています。調査では外輪の連珠部分で指紋を確認することができました。もし長八自身のものとしたら大きな発見となり連珠は手で一つ一つ取付けたこととなります。現存している長八作品のランプ掛けの中では最も大きく、また現場で制作された作品と言えます。聞くとところによると、子供達がボールをぶつけて遊んでいたと言うが、剥落することなく今日まで残っている逸品です。

<果実の図> 1階マエナンド天井中央部(写真-2)

果実の図は女中部屋として使用されていたマエナンド10畳の天井に施されています。1階の座敷は全

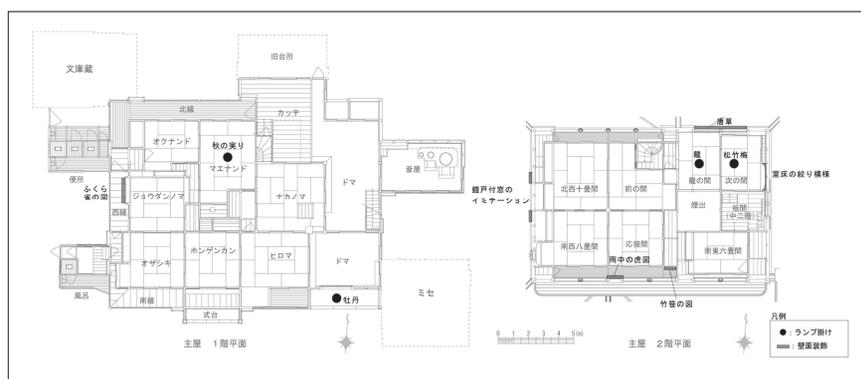


図-1 漆喰鍍絵配置図(工事報告書より)

て竿縁天井または張付天井としていますが、マエナンドのみ天井全面を洋風の意匠を取り入れた漆喰塗り仕上げとなっており、果実の図はその中央部分に施されています。大きさは直径439 mm、漆喰盛り上げの厚みが多いところで24 mm程度あり、図柄の背景自体が椎茸の傘裏を表現したユニークな作品となっています。工法的には天井漆喰仕上げ表面と色合いが類にしていることから円形の輪郭部分を施工した後に、波模様を全面に付け長八独特の置上技法で柿、梨、ぶどう等の果実を表現したもので、彩色豊かで現存する長八のランプ掛けの中でも、他に類例がない華やかな作品の一つであると言えます。

＜龍の図＞2階龍の間天井中央部（写真-3）

龍の図は部屋全体が漆喰で塗籠られた天井の中央部にあります。大きさは直径511 mmで図柄の漆喰の厚みが最も多いところで、30 mm程度で松城家に残る鍔絵の中でもやや厚い図柄と言えます。中央にはランプを掛けるためのフック状の吊り金具が取り付けられ、構図は西を図柄の上とし、前室のアール状の客溜まりから入り見上げると龍の上下の方向が分かるようになっています。図柄は宝珠を抱えた龍体を描いており、経年変化により退色していますが、龍の口と耳には朱色が塗られ、目には玉眼がはめ込まれています。ここでも刷毛等で龍体全体に白色状の色を施す、長八独特の技法で行われています。特に舌の朱色部分で顕著に見受けられる作品となっている。現在、住宅に残る龍をモチーフとしたランプ掛けを見ることができる唯一の作品となります。また、この龍の間では長八特有の粋な演出も見られます。それは前号の窓廻りで龍の間と次の間は意匠的にも和と洋風が混在した空間となっていると述べましたが、松城家住宅は家相に基づいて計画されており、両部屋は東北隅にあります。よって家相上では鬼門となります。そこで、信仰心の厚い長八の発想によって意図的に社寺建築で見られる、天井に龍の

鍔絵を配置すると共に部屋全体を漆喰で塗籠とし、外柱を社寺建築特有の榭と雲形の持ち送りを付け神聖な空間として設け、困難を回避しようとする願いをこめているようにも思われます。

＜松竹梅の図＞2階次の間天井西寄り（写真-4）

松竹梅の図は龍の間と続き間に施されています。天井は龍の間と同様の漆喰塗り仕上げで、龍の間に配置されています。大きさは幅400 mm、高さ370 mm、で模様部分の厚みは最も多いところで、24 mm程度となっています。図柄は三つ葉形状に松が三方に張り出し、中央小円には竹を模したレリーフが施され、その中心に向かって梅の花が咲き、彩色はされていません。長八の作品としては円形の輪郭蛇腹のない珍しい作品と言える。制作者は伝承によると長八作とされていますが、これまでの調査と松城家に残る作品とを比較・検討して、図柄及び漆喰の盛り上げ、鍔の決め込み等の技法が異なっているように考えられます。今後さらなる調査研究が必要であるように思われます。

引用・参考文献

- ・重要文化財 松城家住宅主屋ほか6棟保存修理工事報告書本文編
公益財団法人文化財建造物保存技術協会 令和4年12月 沼津市



写真-1 牡丹の図と落款印章



写真-2 果実の図



写真-3 龍の図



写真-4 松竹梅の図